

## フィリピンの地方ミュージアムについて ア克蘭州Museo It Akeanの例から

小瀬木 えりの\*

### **A Local Museum in the Philippines: The Case of Museo It Akean in Aklan Province**

Erino Ozeki\*

#### **Abstract**

Some features of a regional museum in the Philippines are examined using the case of Museo It Akean (Aklan Museum) in Aklan Province. It is not entirely a governmental entity but a semi-governmental, semi-private institution founded and supported by a religious foundation memorializing the first Filipino archbishop from the province. In spite of its half-private nature, it is deemed and expected to represent the local cultural heritage as if it were an official mission of the museum. Due to limited funding, the museum is operated with a minimal number of staff, and while fund-raising for the museum is a constant task for the foundation members, the curator shows great devotion to the work. It is supported by the enthusiastic love of the concerned people for their home province. The museum's exhibition also seems to reflect the strong local pride and identity, which seem to be united and intensified with Filipino nationalism in a unique way.

#### **キーワード**

museum, culture, exhibition, display, Filipino, identity, nationalism

#### **はじめに**

本稿<sup>1</sup>はフィリピンにおける地方のミュージアム（美術館／博物館）<sup>2</sup>について一事例を紹介し、その設立の経緯や運営の様態を検討し、そこでの展示の特徴について考察を加えることを目的としている。一般に開発途上国のミュージアムは、国家に財政的な余裕のないことから、展示品や収蔵品の管理や保存や修復などをはじめ、特別企画展の開催や学校

---

\*おぜき えりの：大阪国際大学国際コミュニケーション学部教授〈2013.11.7受理〉

の児童・生徒を対象とした学習・啓発機会の提供など、館の活動のすべての領域にわたり、総額予算においてより恵まれていると考えられる先進諸国のミュージアムほど潤沢な予算が享受できない悩みを抱えているものと想像される。財政的に厳しい運営を余儀なくされているであろう途上国のミュージアムにおいて、一定の制約の下でどのような展示や活動が行われているのか、また、それが地域のアイデンティティにどうかかわっているのか、フィリピンの一地方ミュージアムの事例からその一端を明らかにすべく検討していきたい。

## I ア克蘭・ミュージアム

Museo it Akean（フィリピン語でア克蘭・ミュージアムの意。英語でAklan Museumとも呼ばれる。以下、ア克蘭・ミュージアムと記す）は、フィリピン、パナイ島のア克蘭州（Province of Aklan）の州都カリボ（Municipality of Kalibo）の町<sup>3</sup>の中心部に位置する州を代表するミュージアムであるが、日本の地方に存在するような県立や市立といった公立のミュージアムではない。民間の有志からなる財団が設立母体となり、州政府との協力のもとに運営しているいわゆる半官半民の施設である。フィリピンではNational Museum of the Philippines（国立フィリピン博物館）のような首都マニラにある明確な国立のミュージアムが存在する一方、Ayala Museum（アヤラ・ミュージアム）に代表されるような財閥が私財を投じて作った恵まれた大型施設から個人が運営する小規模ギャラリーまで様々な私立のミュージアムも数多く存在している。さらに他方では、地方のミュージアムには民間の有志の活動によって支えられているものも多い。地方において文化を表象する役割を担い、各地域の文化紹介、その発信母体ともなる地方ミュージアムの様態について、以下、ア克蘭・ミュージアムの例を基に紹介していきたい。

### 1 設立の経緯

ア克蘭・ミュージアムは民間の私設団体であるガブリエル・マルテリーノ・レイエス大司教記念財団（The Archbishop Gabriel Martelino Reyes Memorial Foundation, Inc、以下、頭文字をとった略称にしたがいAGMRMFIと記す）によって1980年に創設されたミュージアムである。<sup>4</sup>AGMRMFIはマニラに居住するア克蘭州出身者の有志たちが、1970年代当時マニラ大司教に就任したア克蘭州出身のハイメ・L. シン（Jaime L. Sin、後のシン枢機卿）の要請に応じて、地元のカトリックの聖職者やその宗教活動を支えるために1977年に設立した財団である。財団の設立当初の目的は、カリボに「司教の家」（Bishop's House）という宗教施設を建てる支援資金を募ることであったが、その後、カトリックの精神に基づき州内の救貧活動や、その他州の振興に役立つあらゆる文化プロジェクトへと活動の領域を拡げていき、地元のミュージアムの設立にも関与したのである。[AGMRMFI 2011]

ア克蘭・ミュージアムの建物と敷地はカリボの地方政府の所有で現在も法的にその管理下におかれている。AGMRMFIからの要請に基づき、ミュージアム設立に協力したカ

リボ町が財団に対して1979年に建物の改築と借地を認め、その翌年1980年に開館に漕ぎつけ、現在もその運営を任せているものである。土地・建物の原型が「官」から提供され、施設整備や収藏品・展示品の収集や管理、基本的なミュージアムの運営に関しては「民」の側にある設立団体のAGMRMFIが担う〔AGMRMFI 2011〕という、所有と運営の官民での折衷形態をとり、その意味で半官半民のミュージアムといえる。

AGMRMFIの財団創設34周年記念発行冊子〔AGMRMFI 2011〕によれば、ミュージアムの建物自体は元々スペイン植民地時代の1882年頃に建てられた学校が基礎となっていて、Eskuelahan it Hari (King's School) と呼ばれた当時のスペイン王フェリペⅡ世を記念して建てられたカリボに残る最古の歴史的建造物であったという。スペイン、アメリカの植民地時代、そして日本の軍事占領下でさまざまな施設に利用されてきた数奇な運命をたどった建物である。〔AGMRMFI 2011〕

ミュージアム設立に向けての建物の改築と準備にあたっては、不動産の所有者をカリボ町とし、AGMRMFIが建て替えに資金を提供し、改築に必要な労力や人員などを町側が提供し、相互に協力することで合意した。官がいわゆるハコ物（土地・建物）の基礎を提供して労働力の確保を約束し、民が資金集めとミュージアムの設立と運営にかかわる知恵と技術とモノ（収藏品・展示品）、及び人材（学芸員）を提供するという初期の分業・協力形態はその後も続き、このことがミュージアムの性格に大きく影響しているものと思われる。

## 2 有志による維持・管理・運営

前節で述べたように、ア克蘭・ミュージアムは設立当初の事情から、半官半民とはいえ、実質的な運営はすべて民間財団であるAGMRMFIによって担われていると言っても過言ではない。言い換えれば、官（カリボ町）からはハコ物と最低限の館の維持に必要な人員（ミュージアムの鍵を管理する管理人等）の提供以外には、積極的な支援を期待することはほとんどできないことを意味し、ルーティンの運営及びあらゆる企画の財源となる資金獲得が、基本的には民（AGMRMFI）の努力に委ねられている状態にあるということである。このため、毎年のミュージアムの維持・管理費の捻出はAGMRMFIのメンバーの恒常的な課題となっており、殊にマニラ在住のメンバーの重要な使命はミュージアムを支え続けるための絶え間ない資金調達（fund-raising）活動であるという。<sup>5</sup>

地域を代表する名称を負ったミュージアムが半官半民のようなかたちをとりながらも、設立母体である民間団体に財政面での負担が極端に大きくかかるフィリピンにおけるこうした運営システムは、ア克蘭・ミュージアムに限らず、他の地方ミュージアムにもみられるものと思われる。

例えば、同じパナイ島の歴史都市イロイロ市を代表するイロイロ・ミュージアムにおいても、やはり設立母体は有志からなる私的な団体であり、創立の初期だけでなく、その後の運営にも恒常的に財団が関与し、特に財政面での責任を負うことになる。そのため、ミュージアムの予算が不足し学芸員を雇用する余裕がない場合には、設立に関与したメンバーがボランティア（無償）で働く学芸員を探して協力を依頼するなど、館の最重要の活

動にかかわる学芸員の業務でさえ、外部のボランティアに依存する例もある。<sup>6</sup>筆者が調査した2012年の時点では、イロイロ・ミュージアムの場合には、地元の大学で文化・歴史関係の科目を教えている研究者A氏がボランティアで学芸員を引き受け、館の活動を支えていたが、その他に学芸員はおらず、館外に本務を持つA氏が唯一の学芸員であった。A氏は大学での業務の合い間に、展示品の入れ替えを指揮したり、地元の学校の生徒たちを対象としたミュージアム学習の担当を務めるなど、独りでほぼすべての主要な業務をこなしていた。そのボランティア学芸員A氏によると、無償で働く学芸員は彼が最初ではなく、前任者から依頼を受けて彼自身はその任務を近年引き継いだばかりであるとのことであった。

### 3 官民の相互依存的組織運営

ミュージアム運営に必要な知識と技能を備えた学芸員の人数が極端に少なく、且つ無償のボランティア、もしくは有償であっても僅かな報酬を得るのみのパートタイム的待遇で契約・雇用されている状態は、アクラン・ミュージアムも同様である。アクラン・ミュージアムにおいては、地元で主に画家として活躍し、自らの作品や他のアーティストの芸術作品を展示即売するギャラリー・ショップの経営者であるB氏がやはり単独で学芸員の任務を果たしている。B氏はAGMRMFIのカリボ在住スタッフの一人でもあり、毎日ではなく週のうち何回か必要に応じて館に出勤し、業務をこなす契約を結んでいる。業務に対する報酬は財団の予算から支払われるものの、そもそもミュージアムを支えるプロジェクト自体が財団からの資金提供に依存しているため、財政状況が厳しい折には無償のボランティアとして館の活動を自主的に支えざるを得ない立場にある。

結果的に有償・無償にかかわらず、財団メンバーとしても学芸員の任務を遂行せざるを得ない状況におかれているB氏のような行為は、見方によっては自己搾取とも捉え得るかもしれない。しかし、イロイロ・ミュージアムにおける学芸員A氏の場合も同様であるが、アクラン・ミュージアムにおけるB氏も、契約・雇用の形式面での形態にかかわらず、館における展示や地元住民に向けたサービス及び文化啓発活動に自らの意志で貢献したいという強い意欲を有しているように思われる。地元の名称を冠したミュージアムを、金銭的な利益のためではなく、その住民の一人として自らの意志で支えたいという郷土愛のような精神が、彼らの言葉の端々から強く感じ取られた。郷土を代表するミュージアムを支えるという誇りが、公的に地域を代表する官＝町（municipality）の行政機関の担当者や代表者ではなく、この場合、民間の私人によって体现されているといえよう。

運営の基本を設立発起人からなる民間財団に委ねているとはいえ、官の側がまったく無責任であるというわけではない。むしろ地域を代表するミュージアムの維持・管理・運営の仕事に可能な限り参画し、協力を惜しまないという良心的な姿勢が関係者の間にはみられる。問題はミュージアムに振り向けることのできる安定した恒常的な予算が地方行政機関にほとんどないことであり、これは単にミュージアムやフィリピンにおける文化行政だけにかかわる問題ではなく、フィリピンにおける国家予算全般の使い方、配分のし方にかかわる根本的な問題の現れだと考える必要がある。

フィリピンにおける国家予算は前年度に計画されたとおりに正確に配分されることは減多にないという。次年度の税収入の総額予測が不確かなため、前年度に計画され認められた項目の予算がそのまま忠実に配分される保証はなく、歳入総額に応じての再調整が避けられない状況におかれているためである。さまざまな官庁あるいは地方行政に配分される予算も全体的にその影響を受け、たとえ前年度に認められ、企画されたプロジェクトであっても、予算不足に見舞われ大幅な計画の縮小を余儀なくされたり、場合によっては実施不可能となって中止に至ったりすることも珍しくはないのである。総額予算が明らかになってからの再調整の過程においては、中央から地方に至るまでどのレベルにおいても何らかの行政府との交渉が必要となり、前年度に企画したプロジェクト実施の必要性を強く訴えることで人々は予算確保に努めなければならない。ミュージアム運営においても事情は同じであり、館の運営責任を担う会議体には、設立に関与した私的財団のメンバー以外に、地方行政のメンバーが必ず参画しており、彼らを通じて官によって配分可能な予算を求めるプロジェクトの申請が行われ、また予算執行の当該年度には実際の配分を求めての働きかけも行われるのである。

フィリピンにおける政府財源の不安定さに起因するこのようなガバナンス上の問題を勘案すると、地方におけるミュージアムにおいては、既述のような独特の半官半民の運営スタイルが採られるのも理解できる。すなわち、ミュージアムのルーティンの運営資金の提供は、少なくとも最低限度は恒常的に支える意欲を持った有志を含む私設財団に依存し、官の支給する予算は、(運営に携わる側から見れば) 運がよければ獲得できるかもしれない比較的あてにならない財源候補として、常時要求し続けていかねばならない性格のものと位置づけられるであろう。そのため、地元のミュージアムのために常に何らかのプロジェクトを立ち上げ、それに必要な予算を官(カリボの場合municipality=町、イロイロの場合City=市であるが)にも要求し続ける一方で、民間にも極力支援の輪を拡げ、プロジェクト資金獲得のための募金活動を倦まず弛まず展開するというのが、結局のところ最も妥当なミュージアムの維持戦略となるのであろう。官と民との双方に働きかける活動は、ミュージアムの維持・管理・運営に携わる同じく官と民双方の出身者から成るメンバー間の緩やかな分業と相互依存によって支えられ続けられているといえる。

## Ⅱ ミュージアム展示

### 1 展示品について

次に、前章で述べたような運営実態の下に行われている地方のミュージアムでの展示について紹介していきたい。

ア克蘭・ミュージアムは、前述のようにスペイン植民地時代の学校校舎を改築した単独の建物から基本的には成り立っている。構造は二階建てで横に細長く、二階分のフロアの一部が衝立で仕切られた事務室と、壁で隔てられた若干の収蔵庫としてのスペース、そして会議が行われる机と椅子を設置した場所にさかれている以外は、ほぼすべてが展示スペースに利用されている。





図1：館の全貌

2、図3参照）アティアティハンはカリボの歴史と文化を象徴する行事であり、他の地域のフィリピン人及び外国からの観光客には、それによってのみ、唯一カリボという地名が知られているといえるほど重要な地元のシンボルである。

展示品の分類をコーナーごとに見ていくと、およそ以下のような配置になっている。<sup>7</sup>

まず、1階のフロアには、入口に受付と記帳台があり、来場者から向かって右手側の入館後に一番最初に目に入る場所に、地元カリボの祭としてフィリピン全土で有名なアティアティハン・フェスティバル (Ati-atihan Festival) <sup>8</sup>の際に行われる踊りの扮装をした人形が置かれている。(図



図2：アティアティハン装束の人形像



図3：アティアティハンで人が身につける装束

アクラン州の中心であるカリボを象徴するアティアティハン関連の展示物のすぐ隣には、パナイ島の古い地図が展示され、パナイ島およびアクラン州の歴史が概説されているコーナーがある。特筆すべきは、パナイ島の歴史において、アクランは長らく隣のカピス州の一部と位置づけられており、言語文化的に異なるカピスからの分離独立を50年以上にわたって訴え続けてそれを実現した歴史的経緯をもつことである。単独の州としてのカピスからの分離独立が認められた1956年はアクラン州の独立記念年と地元では捉えられており、このことが他の州とは異なるアクラン独特の地元アイデンティティの一因を成している<sup>9</sup>ように思われる。

この他、1階の入り口を背にして向かって右側の展示フロアには、アクランの歴史・文化・産業にかかわるさまざまな文物が展示されている。それらは州内で製造されたものばかりではなく、フィリピン国内で生産されたものばかりでもない。その概要を紹介すると、フロアの右手奥には、スペイン時代にヨーロッパもしくは中国、ベトナム、タイなどから海洋貿易ルートでフィリピンに伝わった陶磁器などを中心とした出土品が陳列されている。(図4、図5参照)

また、アメリカ時代やそれに続くコモン・ウェルス期に用いられた鉄製のアイロンなどの生活用具や竹や木製の民具、日本占領時代の遺物である日本刀や日本軍兵士が身につけ



図4：中国・タイの青磁碗



図5：フィリピンに伝わり国内で発掘された出土品などの展示

ていたと思われる遺品類、地元で製造され、フィリピン革命での戦いなどに用いられたゴロなどの刀剣類、州の伝統的な主要産業のひとつであるパイナップル葉脈繊維の織物ピーニャの古い衣装や、その他地元で生産される天然繊維アバカ（マニラ麻）の織布やそれを使った手工芸品、ニト（地元山中に自生するシダ類の一種）などの編み籠類などがそれぞれのコーナーに分けて並べられている。

1階の反対、左側の展示場に目を移すと、ア克蘭州出身で州の発展に貢献したと考えられている歴代州知事など地元名士たちの肖像画、彼らの生活用具や遺品類、地元の子どもたちの手になる絵画の展示、小規模なミュージアム・グッズ・ショップなどがあり、また1階の奥には細長い収蔵庫と手洗いがある。



図6：室内を模した展示

途中の踊り場で二方向に分かれている階段を上って2階フロアに移動すると、入り口側を背にして左側の展示スペースには、1階と同様に、州の伝統織物であるピーニャの衣装展示を中心に、歴史的なコスチュームの陳列、それらの衣装と関連した（時代考証があまり正確とはいえないが）19世紀～20世紀初期の風俗の再現を試みた寝室を中心とした室内の展示が見える。（図6参照）階段の向こうの通路には、数少ない州内におけるエンターテインメント商業施設サンパギータ・ガーデンズ（Sampagueta Gardens）<sup>10</sup>で販売されているトレードマークの人形の展示、2階の右手奥には財団の創設にかかわる最も重要な宗教関係の展示物が並んでいる。宗教展示のコーナーには何体かの聖像

と祭壇、それに州出身の最も有名なカトリック指導者シン枢機卿の記念品類がショーケースに入れられ、比較的広いスペースが捧げられている。（図7参照）その奥にはパーテーションで簡単に仕切られたミュージアムの事務所がある。

## 2 展示と地域アイデンティティ

前節で紹介したア克蘭・ミュージアムにおける展示品は大きく分けて二通りのタイプに分類できるものから成り立っていると考えられる。ひとつは、歴史・文化・経済（産業）・政治など何らかの分野での地元ア克蘭州にかかわりのある人物や物に関する展示であり、もうひとつは、フィリピン及び州の主流派人口の宗教（カト



図7：宗教展示の様子



リックの信仰)に結びついたものである。

前者のような地元にかかわる展示は、フィリピンに限らず地方のミュージアムであれば一般にどこでも行われている展示品選択の基本基準を示すものであり、アクラン州特産あるいは州に特有といつてよいものも含まれてはいるが、展示品全体を見渡した場合に、それ自体に他と区別できるほどの特徴があるとは思えない。

もう一方の宗教関連の展示コーナーについては、このミュージアムの開館を可能にしたスポンサー財団であるAGMRMFIの創設動機にかかわる重要な品々を含むものであり、且つカトリックの人口が全体の約80%を占める敬虔なカトリック信者を多数抱えているフィリピンにおいて最重要の展示であるといえる。

これら二種類のタイプの展示品全体を観察していると、展示の方針を決定し、実際に展示する文物を取捨選択している学芸員をはじめミュージアムの運営に携わる人々の、アクランという地域に対する郷土愛、地元アイデンティティを強く表象しようとする意図のようなものを感じる。地元アイデンティティに関しては、二つの点での差異化で強調されているように思われた。ひとつはアクランという地域名に拘り、パナイ島内の他の州との明確な区別を意図した、カピスからの独立の歴史がミュージアムの前面に大きく採り上げられていることであり、もうひとつは、島内にとどまらずフィリピン全土における他の地域との差異化に関して、州外の人々にも直ちに理解されるこの地域を象徴的に示すアティアティハンを前面に押し出していることである。アクラン (Aklan) を表すAkeanというミュージアム名も、アクラノン語に多発する特徴的な二重母音を備えた発音を含む地元の言語での地名表記であり、フィリピンの他の言語集団の人々には発音することすら難しいこの二重母音を含む本来の地域名を敢えて採用することにより、彼ら自身の言語とともに、地域の象徴としてこの名を称揚しようとしているように思われる。

フィリピンの他の地域とは異なるアクランらしさやその独自性を差異化によって強調しようとする一方で、地元アイデンティティというものの一見矛盾するような両義的なあり方もそこには示されているように感じられる。それは、フィリピンのナショナル・アイデンティティと、アクラノン (アクランの人間) であることが矛盾なく統一されていることを示し、強調するような展示がみられる点に現れている。彼らにとって、理想的にアクラノンらしいアクラノンであるということとは、誰よりも (他の地域の人々に負けず劣らずという意味において) フィリピン人らしいフィリピン人であることによって、実現されると恰も主張しているがごとくにみえる。その意味で、フィリピン革命の精神を支えた民衆カトリシズム<sup>11</sup>の伝統を持つこの国では、敬虔なカトリックであることは文化・宗教的に重要であるばかりでなく、植民地からの独立を勝ち取った国家への政治的忠誠の問題として重要であり、彼ら自身のやり方でよきカトリック教徒であることは、よきフィリピン人であることに他ならず、よきフィリピン人であればあるほど、よりよきアクラノンとして自らを他のフィリピン人に対して誇ることができる存在になれると考えているように思われる。この点において、フィリピンにおけるカトリック世界の頂点に立った人物であるシン枢機卿をアクラン州の出身者として持つことは、彼らにとって大きな誇りであり名誉であると考えられている。そのため、シン枢機卿の重要な記念品や遺品は、彼の直接

の故郷であるニューワシントンに展示するばかりでなく、州全体を代表するカリボに位置するアクラン・ミュージアムにもその一部をぜひ展示すべきであるという考えは、財団の関係者及びミュージアムの運営役員から当然の主張として出されてくるのである。

アクラノンがフィリピン人らしさを代表する性質を有することを強調しようとするような展示は、カトリックの信仰にかかわるものだけにとはとどまらない。それは、例えば、民族的歴史起源に関するものにも表れており、前述のパナイ島およびアクランの歴史的起源に関する伝承についてもあてはまる。ダトゥ・バンカヤ<sup>12</sup>らに率いられて最初に来島したボルネオからの移住者たちは、その後パナイ島を離れ、ルソン島のタアールやビコール半島などにさらに移住していったと言い伝えられている。この伝説的紀源説における、後に低地キリスト教系フィリピン人の共通の祖先となったと考えられるボルネオからの移住者たちが最初に定住したパナイ島の中心に位置するのがアクラン州であることから、アクラン州の住民の祖先とは、今日のフィリピン人全体の祖先につながるといっても過言ではないという捉え方が出てくるのである。

また、同様に文化の面においても、スペイン植民地時代の19世紀に低地キリスト教徒全体の共通文化として花開いたピーニャの繊細な繊維利用、手織物、それを用いた上流階級の伝統の衣装、今日ではナショナル・コスチュームとしても認められている国民正装であるバロン・タガログの最高級素材の唯一生き残った産地であることも、アクラノン・アイデンティティに大きな影響を与えている。

## 結 論

以上述べてきたことからまとめると、以下のようなことが考えられる。フィリピンにおける地方のミュージアムの一例として紹介したアクラン・ミュージアムは、完全な公立ではなく、また私立ともいえない半官半民の性質をもつミュージアムである。その運営の実態においては、設立母体である私設の財団に大きく依存しながら、地方を代表するミュージアムとしての大きな役割を担っている。完全な公立ではなく、民の力がかかなりの部分を支えているミュージアムでありながらも、地域を表象する場となっていることから明らかなように、フィリピンの地域アイデンティティを積極的に支えているのは、官よりも、自ら進んで自主的に行動する民の力ではないかと推測される。

また、地域アイデンティティのあり方には両義性がみられ、フィリピンの他の地域との差異化やアクラン自体の独自性を強調しようとする一方で、他の地域に負けず劣らず、あるいはより以上にフィリピンであることを逆に強調するような意図が存在するのではないかと思われた。そのことはまた、フィリピン的であるというナショナル・アイデンティティにかかわる部分と、アクラノンの地域アイデンティティにかかわる部分とが本質的に矛盾せず、同一方向を向いているという低地キリスト教徒の人々の間の信念を表していると思われる。フィリピン人としてのナショナル・アイデンティティの特徴は、理想的な姿を体現していたと考えられる過去に回帰しようとする一般的な志向とは異なり、未だ見ぬあるべき自己の姿を未来において実現しようとする未来志向にあると既

存研究によって指摘されている<sup>13</sup>。この点で、フィリピン人の郷土愛や地域アイデンティティも、単に過去の起源に遡って自らのルーツを確かめようとする志向性を有するものではなく、フィリピン人とは何かというナショナル・アイデンティティにおける根本的な問いの模索につれて、それと共鳴しながら、同時進行的に模索され続けているものではないだろうか。

#### Endnotes

- 1 本報告は、平成24年度大阪国際大学特別研究費（学術研究助成）課題番号3「文化表象と文化の提示に見られるイメージの生成について～トルコにおけるイスラームの聖人画とフィリピンにおける地方美術館での文物展示を例として」により、2012年8月～9月に実施したフィリピン調査で得た資料・情報に基づく成果である。
- 2 日本では博物館・美術館という主として2つの名称が英語のmuseumに該当する施設に使用されているが、本稿でのフィリピンにおけるmuseumはどちらを指すのか明確でないことがあるため、すべてミュージアムと表記する。
- 3 フィリピンの行政区分単位ではprovince（州）の下に、city（市）もしくはmunicipalityがおかれているのが一般的である。municipalityの訳語として、ここでは日本の行政区分単位としてそれに最も近い「町」を用いる。
- 4 本稿でのアクラン・ミュージアムについての記述は、Archbishop Gabriel M. Reyes Memorial Foundation, Inc. 編の財団の創設34周年を記念し、財団が支えるアクラン・ミュージアムへの支援募金を呼びかけた小冊子*Ro Pagbueoligan, 34<sup>th</sup> Foundation Day: A Fund Raising Drive for the Museo It Akean*, October 29, 2011.からの情報、及び、2012年8月～9月に筆者がカリボにおいておこなったアクラン・ミュージアムの学芸員B氏への聴き取り調査からの情報に基づいたものである。なお、この小冊子にはページ数の記載が無いため、文中においては[AGMRMFI 2011]のように表記する。
- 5 ミュージアム運営の実態についての情報は、注4で示したように、アクラン・ミュージアムの学芸員B氏への聴き取り調査、及びAGMRMFIの財団役員を務めるC氏への筆者の数年来の聴き取り調査に基づくものである。
- 6 イロイロ・ミュージアムの学芸員A氏に2012年8月～9月に筆者がおこなった聴き取り調査に基づく。
- 7 以下の展示品と館内の様子は、2012年8月～9月に筆者が調査した時点のものであり、展示の配置・配列や展示品そのものの入れ替えなどの変更は様々な事情で頻繁に行われるため、実際と異なることもあり得るをお断りしておく。
- 8 アティアティハンとは、今日のアクラン州の主要な人口を構成するマレー系の人々のパナイ島への渡来起源にかかわる伝説的歴史を説明し記念した行事であり、土着化したカトリック信仰（サント・ニーニョ崇拜）が後に融合した独特の祭（フェスティバル）に発展したものである。ボルネオから舟に乗って訪れたマレー系の人々の移住を、交渉によって平和裏に受け入れたとされる先住民アテの人々に感謝し、その姿に偽装して、全身に泥や炭などを塗り先住民に近い衣装を身に着けて、戸外で踊るパレードが中心となった毎年1月の第3週に行われる恒例祭である。近年では州内の海浜リゾートであるボラカイ島の観光開発に伴い、カリボだけでなくボラカイなどアクラン州の他の地域でもアティアティハンの仮装行列が行わるようになっており、フィリピン全土はもとより、外国からの観光客を惹きつける重要な州を代表する行事となりつつある。
- 9 アクラン州の人々がもつ地元アイデンティティの基盤には、カピスからの政治的な分離独立という歴史的経緯以外にも、この州独自の言語であるアクラノン語（Aklanon）の存在が大きいといえる。アクラノン語はパナイ島内のほぼこの州のみで話されている言語であり、隣接するカピス州とも西隣りのアンティケ州とも異なる独特の言語集団が構成されている。
- 10 アクラン州ニューワシントンにあるアメリカ人退役軍人サミュエル・ブッチャー（Samuel

Butcher) 氏が作ったホテル、プール、レストラン、会議場、ギャラリー、チャペル、オリジナルデザインの人形などを販売する土産物ショップを備えた総合リゾート施設。ブッチャー氏がデザインし、フィリピンで製造させ、アメリカで販売してヒットした人形 (precious moment dolls) の売り上げにより建設したフィリピンにおける自邸を兼ねた商業施設。

- 11 外来宗教であるカトリックを受け入れ土着化し、自らのものとして完全に内面化し独自の信仰へと発展させた人々が、その信仰を文化的な解釈や行動規範だけでなく、カトリックによるスペインの支配への抵抗の理念としても用いた。フィリピンにおける民衆カトリシズムについての詳細は、池端 1987、Ileto 1979を参照。
- 12 Datu Bangkaya、アティアティハンの起源に関する伝説的歴史に関する言い伝えの中で、政争に敗れてボルネオからパナイ島にやって来たとされる船団の人々を率いていた10人のリーダーのうちの1人。アクランを治めたと言い伝えられている。起源伝説については前出の注を参照。
- 13 清水展「未来へ回帰する国家－フィリピン文化の語り方・描き方をめぐって」『立命館言語文化研究所』第9巻3号 1998年。

#### 参考文献

- ・ Archbishop Gabriel M. Reyes Memorial Foundation, Inc. (AGMRMFI) 2011, *Ro Pagbueoligan, 34<sup>th</sup> Foundation Day: A Fund Raising Drive for the Museo It Akean*, AGMRMFI
- ・ 池端雪浦『フィリピン革命とカトリシズム』勁草書房 1987年
- ・ Ileto, Reynaldo, C., 1979, *Pasyon and Revolution: Popular Movements in the Philippines, 1840-1910*, Ateneo de Manila University Press.
- ・ 清水展「未来へ回帰する国家－フィリピン文化の語り方・描き方をめぐって」『立命館言語文化研究所』第9巻3号 1998年
- ・ 清水展「フィリピン人：未来へのアイデンティティ」『現代フィリピンを知るための61章』（第2版）所収 明石書店 2009年